

She made him a good wife について :

統語構造と意味のミスマッチ

登田 龍彦

On *She made him a good wife*:

Mismatch between syntactic structure and meaning

Tatsuhiko TODA

(Received September 30, 2016)

1. はじめに

(1a) *She made (him) a good wife.* における *a good wife* は、目的語の *him* が省略できることから、現代の英文法理論では、(1b) *She became a good wife.* における *a good wife* と同じ統語的機能を示して *made* の補語 (predicate) として機能するとする分析と、*made* の目的語として機能するとする分析の二種類に分けられる。前者の立場を取る分析は Quirk *et al.* (1985) や南出 (2014⁵) であるのに対して、後者の立場を取る分析は Huddleston and Pullum (2002) や安藤 (2005) である。

- (1) a. *She made (him) a good wife.*
b. *She became (*him) a good wife.*

小論の目的は、構文文法 (constructional grammar) の視点から (1a) の構文型を考察し、(1a) の *a good wife* は *made* の目的語であるとする分析が妥当であり、(1a) と (1b) は共に「彼女は良い妻となった」と同じように訳されることがあるが、(1b) の方は与格の *him* を取ることができないことから本質的には全く異なる構文であると主張することである。

小論の構成は以下の通りである。まず第2節では、(1a) についての先行研究を吟味する。第3節では、構文文法の視点から (1a) はいわゆる (1b) のような第三文型の構文型に準じる SVOC の構文型ではなく第四文型の構文型 SVOO を示す二重目的語構文 (double object construction) と分析すべきであることを、論証する。第4節では、(1a) が示す統語構造と意味のミスマッチについて強要 (coercion) という概念を援用しながら、(1a) の *a good wife* は *made* の目的語であるとする分析の妥当性について議論する。最後に主張をまとめる。

2. *She made (him) a good wife* 構文の先行研究とその特性及び *become* と *make* の違い

まず、(1a) *She made (him) a good wife.* の *a good wife* が *made* の補語 (complement) として機能するとする分析として Quirk *et al.* (1985: note [c], 1199-1200) の記述 (2) を見てみよう。¹

- (2) The copula relation can obtain not only between the object and complement as in [1], but also between subject and complement as in [2]:

[1] *She made him a good husband.* [SVO_d C_o]

[2] *She made him a good wife.* [SVO_i C_s]

[1] has the passive analogue *He was made a good husband*; but in the entirely different construction of [2], where the copular relation is between *she* and a *good wife*, no passive is possible. The meaning is: 'She was a good wife to him'. A prepositional verb of this same unusual pattern is *strike ... as in*, for example:

He *struck* me as a brilliant strategist.
 where a *brilliant strategist* is subject complement.

(2) では、(3a) の him と a good husband の間に見られる主述の連結関係 (copula relation) が (3b) の she と a good wife の間にも見られるが、前者が He was made a good husband. と受身文にすることができるのに対して後者は不可能であることから、Quirk *et al.* は両者は全く異なる構文 (entirely different construction) と仮定し、それぞれ [SVO_aC_o] と [SVO_iC_s] のように異なる構文表示を付与している。

- (3) a. She made him a good husband.
 b. She made him a good wife.

さらに、同様の分析を行っている南出 (2014⁵) の記述 (4) を取り上げてみよう。²

- (4) a. 他 11 a) [SVOC] 〈人・物が〉 O 〈人〉 にとって [のために] C 〈人・物〉 になる《◆Cは通例「(よい意味の) 形容詞+名詞」, 受身不可》 || She will *make* him a good wife. 彼女は彼の良い妻になるだろう (= She will *make* a good wife for him) 《◆書き替えの *make* は自動詞》
 b. 自 7 [SVC] … に (ふさわしく) なる, … の特性をそなえる《◆使役の意の再帰目的語が落ちて自動詞用法化したものと考えられる; become に比べて資質・努力が含意される》 || Wood *makes* a good firestarter. まきはよいたきつけになる / He will *make* a fine teacher. 彼は立派な先生になるだろう.

(4a, b) の他動詞用法と自動詞用法の構文表示 [SVOC] と [SVC] から明らかなように、南出は、Quirk *et al.* (1985) と同様に、(1a) の a good wife は made の目的語ではなく補語として分析している。

つぎに、(1a) の a good wife は made の目的語として機能していると分析する Huddleston and Pullum (2002: 256) の記述 (5) を見てみよう。

- (5) a. She made him a good husband. [PC^o: complex-transitive construction]
 b. She made (him) a good wife.
 c. She made (him) a teddy-bear. [O: ordinary transitive construction]
 “What then of [5b]? From a semantic point of view *a good wife* is like *a good husband* except that it applies to the subject *she* rather than the object *him*. And indeed *a good wife* here is commonly analysed as a predicative complement. We would again argue, however, that from a syntactic point of view [5b] belongs with [5c], not with [5a]—that *a good wife* is an object, comparable to those in [6].”
 (6) a. Changes in the basic wage-rate constitute an argument for raising prices.
 b. Sue Brown provides an excellent example of a woman who has achieved outstanding success in the world of business while bringing up a large family.
 c. This proposal represents a serious threat to our standard of living. (Huddleston and Pullum 2002: 255)

(5) の記述から明らかなように、Huddleston and Pullum (2002: 256) は、統語的視点と意味的視点を明確に区別し、(5b) (= (1a)) の動詞 *made* に対して (6) に見られる動詞の用法と同様に a good wife を目的語とする他動詞分析を行っている。つまり、(5b) は通常他動詞構文 (5c) と同類であって、目的語補語を取る複雑な他動詞構文 (5a) と同類ではないと主張する。

彼らが (6) に対する統語的分析の根拠としてあげているのは、大きく二点ある。まず、最初の根拠は、動詞の直後の要素が補語の場合であれば形容詞句や無冠詞名詞句が可能であるにもかかわらず、不可能であるという点 ((7) 参照) と動詞の目的語を主語とする受動文が動詞によって頻度の差はあるものの可能であるという点である ((8) 参照)。³

- (7) a. *She {constituted/provided} treasurer.

- b. *This proposal represents intimidatory.
- (8) a. It would be possible to take sport in general, or indeed one particular sport such as cricket, and explain the material and ideology conditions surrounding its production in a specific socio-cultural order such as that constituted by Australia.
- b. An excellent example of a woman who has achieved outstanding success in the world of business while bringing up a large family is provided by Sue Brown.

同様に, Huddleston and Pullum (2002: 256-7) は (5b) に対する統語的分析の根拠を二点述べている。まず, 決定的な最初の根拠は, a good wife が形容詞句や無冠詞名詞句に置き換えることができない点である ((9)参照)。

- (9) a. *She made {exemplary/treasurer}.
- b. She made him {grateful/secretary}.

(9b) が容認される読みを持つ場合は, grateful と secretary が him の述語とする (5a) 型に属する場合であって, 問題の (5b) 型に属する場合ではないと説明されている。

Huddleston and Pullum (2002: 256-7) が主張する根拠の二番目は, 捕部構造 (complementation) が (5c) 型と同様に直接目的語が間接目的語に先行されると同時に前置詞付き構文 (すなわち与格構文 (dative construction)) との交替形を持つということである ((10)参照)。

- (10) a. She made a teddy-bear for him.
- b. She made a good wife for him.

Huddleston and Pullum (2002: 257) は, (1a) (=5b) が (5c) と異なるのは関係づけられる受動文が存在しないことであるが, これは多くの他の動詞が受動態を取らない事実があることと, 意味的に補語に似ている目的語が存在するからといって, 常に受動文の主語になれるわけではないので, 驚くべきことではないと, 述べている。

さらに興味深いことに, Huddleston and Pullum (2002: fn. 35, 257) は (11a, b) 間に見られる類似した意味的な関係が (12a, b) 間に見られるので, (12a, b) の a table と a man は, 両方とも目的語であると主張したいと述べている。

- (11) a. She made a teddy-bear.
- b. She made a good wife.
- (12) a. She made a table out of the remaining timber.
- b. She made a man (out) of him.

急いで付言すると, (11b) 型の文に彼らの主張を当てはめると下記のようなパラフレーズ関係となる。

- (13) a. She will make a good nurse.
- b. She will make a good nurse of herself. (小西 1996: 50)

つまり, (13b) は彼女は自らの資質を元にして良い看護師になるだろうということを意味する。

さらに, Huddleston and Pullum (2002: fn. 35, 257) は, (12a, b) が同じ構文に属する傍証として (14a, b) のように into を伴う文がそれぞれ存在することを指摘している。

- (14) a. She made the remaining timber into a table.
- b. She made him into a man.

つぎに, 国内の英文法書である安藤 (2005: 22-3) の分析について検証してみよう。安藤は, 問題の構文 (15c) I'll make you a fine wife. を, 間接目的語が受益者 (benefactive) を表すので, for 句で書き換えることができるこ

とを根拠として（(16)参照），buy 型の SVOO 構文の典型例である（15a, b）と同列に扱っている。

- (15) a. My father bought me a tape recorder.
 b. Mother will make me a new dress.
 c. I'll make you a fine wife. (Hemingway, *A Farewell to Arms*) (私, 素敵な妻になってあげるわ)
- (16) a. My father bought a tape recorder for me.
 b. Mother will make a new dress for you.
 c. Mary will make a good wife for you.

安藤の主張は、問題の構文が二重目的語構文で与格構文との交替を示すことができるという基本的な統語的分布に立脚し、Huddleston and Pullum (2002) の統語的視点からの主張と軌を一にするものであり、妥当であると思われる。

これまで問題の *She made (him) a good wife.* の *a good wife* を補語と解釈する意味的視点からの分析と目的語と解釈する統語的視点からの分析を概観してきた。小論の立場は、後述するように、後者の *a good wife* を目的語と解釈する統語的視点による分析を擁護するものである。

本節では *There* 構文を例に取り、構文型という統語的性質のものに、意味的分析を導入することには矛盾があることを指摘しておくことにする。

- (17) a. (?)A book is on the desk.
 b. There is a book on the desk.

(17b) は、「机の上に本がある」という意味を表すという点で (17a) と知的に同義的 (cognitively synonymous) であるからといって、*a book* が (17b) の構文型における統語的主語とは言えない。なぜなら、(18) における虚辞 (expletive) の *there* が主語・助動詞倒置や付加疑問文において統語的に主語の性質を示すからである。さらに、*there* が、統語的に主語の性質を示すものの、意味的には主語ではないことは明らかな事実である。

- (18) a. Is there a book on the desk?
 b. There is a book on the desk, isn't there?

次節で小論の主要な議論に入る前に、*The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM Version 4.0* (2009²) (OED²)、*Longman Dictionary of Contemporary English* (2014⁶) (LDCE⁶)、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2015⁹) (OALD⁹) 等の英英辞書の記述 (19) – (21) を踏まえながら、(1a, b) の用法の相違について触れておくことにする。⁴

- (19) I. Senses in which the object of the verb is a product or result.
 28 Of persons: To become by development or training. Also, with obj, a n. qualified by *good*, *bad*, or other adj. of praise or the contrary: To perform (well, ill, etc.) the part or function of.
 1572 Middelmore in Ellis *Orig. Lett. Ser.* ii. III. 8, I think he [the Duke of Anjou] will make as rare a prince as any is in Christendome...1885 J. Payn *Luck of Darrells* I. viii. 125 She will make him a good wife. (OED²)
- (20) 11 have a quality
 [linking verb] to have the qualities that are necessary for a particular job, use, or purpose:
I'm sure you will make a very good teacher. | *The hall would make an ideal venue for a wedding reception.* |
An old cardboard box makes a comfortable bed for a kitten.
 [Grammar: Linking verbs
Make is a linking verb in this meaning. It links the subject of the sentence with an adjective and noun: *You'll make a wonderful father.* | *The leaves make a pretty table decoration.*] (LDCE⁶)
- (21) 13 be suitable
Linking verb, to become or develop into sth: to be suitable for sth: *She would have made an excellent teacher.* ◇

This room would make a nice office. (OALD⁹)

OED²は、問題の *make* の意味を動詞の目的語が産物あるいは状態であるような意義の類に分類し、初例として初期近代英語期の用例を上げている。OED²の語義説明の中では「...の役割や機能を遂行する (To perform (well, ill, etc.) the part or function of)」という意味の他に、「発達して、訓練されて (by development or training)」という意味が記述されており、この変化・発達の意味が含意されるのが問題となる。私のインフォーマントによれば、*make* は *become* と異なり「最初から (彼の良い妻) であった」ことを表現するため、(22a) は容認されないと指摘する。⁵

- (22) a. *She started off bad, but she made a good wife.
b. She started off bad, but she became a good wife.

この事実の傍証として、「オタマジャクシは蛙になる」というような変化過程を意味する場合は、*make* ではなく *become* が適合する ((23a)参照)。これに対して、「2たす2は4」というような同等を意味するすなわち状態を意味する場合は、*become* ではなく *make* または繫辞の *be* 動詞が適合する ((23b)参照)。さらに、小西 (1996: 111) が引用している「5の7倍は35になる」を意味する (23c)の動詞 *give* は、例え繫辞の *be* 動詞とパラフレーズ可能だからといって、*thirty-five* を補語とする自動詞であるとは言い難く、問題の動詞 *make* と同様に *thirty-five* を目的語とする他動詞であると考えるのが穏当であろう。

- (23) a. Tadpoles {*make/become*} frogs.
b. Two and two {*make /become/are*} four.
c. Seven times five {*give(s)/make(s)/is/are*} thirty-five.

ちなみに、外国語学習者用の現代英英辞典である LDCE⁶ と OALD⁹ は、前者が「特性を備えている」という意味のみを記載しているのに対して、OALD⁶ は「発達して」という意味記述を残している点に違いはあるものの、共通に見られる特徴は、連結動詞 (linking verb) として表示して、自動詞あるいは他動詞の表示を避けている点である。OED²の記述を踏襲して問題の *make* の用法を他動詞用法と分類している国内の辞書として竹林 (2002⁶) (新英和⁶) を上げておく ((24)参照)。

- (24) *vt.* 5e [しばしば間接目的語を伴って] (発達 [修養] して、訓練されて) ... になる: You'll ~ a wonderful wife for Tom. トムにとって素晴らしい奥さんになりますよ。/ He would have made her a good husband. 彼女と結婚したらさぞよい夫になったろう。/ He would ~ a good teacher. いい先生になるだろう。(新英和⁶)

以上の観察を踏まえると、*make* を訳する際には、*become* のような変化過程というよりは「...の素質がある」、「...に適している」などのような状態的意味を強く考慮すべきであると思われる。このことを端的に表している以下の文脈を考えてみよう。⁶

- (25) a. 'I thought girls always wanted to be married.'
'They do. But, darling, I am married. I'm married to you. Don't I make you a good wife?'
'You're a lovely wife.' (Hemingway, *A Farewell to Arms*, A Penguin Book, p.91.)
「わたし、あなたのいい奥さんじゃないかしら？」
b. 'You see I'll make you a fine wife.' Catherine said. 'I'll be able to talk art with your customers.' (p.217)
「ほらね、わたしは、この通りあなたのいい奥さんになる資格があるのよ」
c. 'Darling, why should I be worried? The only time I ever felt badly was when I felt like a whore in Milan, and that only lasted seven minutes and besides it was the room furnishings. Don't I make you a good wife?'
'You're a lovely wife.' (p.226)

「(気になるわけがないじゃありませんか。) ...いまはわたし、あなたの立派な奥さんになっているでしょう」(大久保康雄訳)

(25a, c) においては、後続文 *You're a lovely wife.* から分かるように、現時点における状態が問題となっている。この場合には大久保が訳しているように、*Don't I make you a good wife?* は「わたし、あなたのいい奥さんじゃないかしら?」とか「いまはわたし、あなたの立派な奥さんになっているでしょう」となる。これに対して、(25b) のような未来時が問題となる場合は、*I'll make you a fine wife.* は「あなたのいい奥さんになる資格がある」となるのであろう。

本節では、*She made (him) a good wife.* における *a good wife* を *made* の補語 (predicate) として機能しているとする意味的分析と、*made* の目的語 (object) として機能しているとする統語的分析の二種類について検証・吟味し、統語的分析の方がより妥当であると主張した。次節では、構文型の視点から本主張の妥当性について議論する。

3. 統語的分析の妥当性

Pinker (1989, 2013²; 2007; 2013) のような語彙意味論的分析 (lexical-semantic analysis) でも、Goldberg (1995; 2006) のような構文文法的分析でも、(26a) に示されるような受益を表す二重目的語構文には、間接目的語指示物 NP₂ が直接目的語指示物 NP₃ を直接的にあるいは比喩的意味において所有することで何らかの利益 (或いは被害) を受けるという関係 (26b) が成立するという特徴が見られると主張している。問題の構文 (26c) にも同様の関係、すなわち彼は良い妻を持っているという関係が成り立つ。

- (26) a. Oh Lord, won't you buy me a Mercedes-Benz? (Pinker 2007: 62)
 b. NP₁ V NP₂ NP₃ => Y₂ HAVE Z₃
 c. She₁ made him₂ a good wife₃.

従って、問題の動詞 *make* による二重目的語構文には何らかの「所有関係」が伴うという厳しい条件が課せられることになり、以下のような (27a, b) における容認性の相違も説明できる。

- (27) a. She made her students a good elementary teacher.
 b. *She made her parents a good elementary teacher.

生徒に対して教師として良い教育活動を行ったということは全く自然で理に適った経験であるのに対して、自分の両親に対して教師として良い教育活動を行ったということは全く不自然であると言える。

二重目的語構文型の決定的な特徴が二つの目的語間のいわゆる所有関係であると仮定して、表面上二重目的語構文型に類似した構文において所有関係が二つの目的語間に成り立つのであれば、その構文型は二重目的語構文であると考えられる十分な理由はあると思われる。

さらに、問題の構文に生起する動詞 *make* が、(28) から明らかなように、動詞 *bake* と同様に Pinker (2007: 62) が指摘する「誰かにあたえることを意図して何かを創造する (creating something with the intent of giving it to someone)」という二重目的語構文型に生起する動詞の典型的な特徴を備えている。

- (28) a. Bake me a cake as fast as you can. (Pinker 2007: 62)
 b. He made her a toy horse, using just some straw and bamboo twigs. (LDCE⁶)

以上の観察から、問題の構文を、主語指示物が自らの資質能力を材料にして間接目的語指示物にとって有益な存在物、つまり良い妻などを創造するという点で、周辺的な (peripheral) 二重目的語構文として位置づけることも穏当であると思われる。

本節では、問題の構文 *He made him a good wife.* に二重目的語構文型のいわゆる所有関係という特性が *him* と *a good wife* の間に見られるという理由で、*a good wife* は (直接) 目的語であると主張した。次節では、動詞の

意味とそれが生起する構文の関係、特に統語構造と意味のミスマッチについて他の構文をも言及しながら考察する。

4. 統語構造と意味のミスマッチと強要 (coercion)

小論では、問題の構文 *She made him a good wife.* における *a good wife* は、意味的には確かに主語 *she* との補語関係はあるものの統語的振る舞いと所有関係の存在という構文の特徴からして動詞 *make* の目的語であり、文法関係を決定するのは動詞それ自体の意味ではなく構文全体の力も大きく関与すると主張していることになる。

たとえば (29a) に生起している *you* はそれ自体では (29b) の場合と異なり意味的には駐車する対象にはなり得ないが、受動文の主語すなわち *park* の目的語としての文法的機能を担っていると言える。つまり、*you* は *your car* の代用となり得る。

- (29) a. Where are you parked?
b. Where are your car parked?

さらに、次の例を見てみよう。

- (30) a. Frank sneezed the napkin off the table. (Goldberg 1995: 55)
b. *Frank sneezed the napkin.

sneeze はくしゃみをして口や鼻の中のものなどを飛ばしたりする場合を除けば他動詞用法はないので (OED² s.v. *sneeze* 3 参照)、ナプキンを飛ばすことはできず (30b) は非文法的である。しかし、(30a) のように *off the table* のような方向を表す語句 (directional phrase) が後続する場合は、使役移動構文 (caused-motion construction) として非状態動詞によって表される行為に基づいて、目的語指示物のある方向に移動させる意味を表し ((31)参照)、「フランクはくしゃみをした勢いでナプキンをテーブルから飛ばした」という意味を表すことができる。

- (31) a. [SUBJ [V OBJ OBL]] (where V is a nonstative verb and OBL is a directional phrase)
b. 'X CAUSES Y to MOVE Z' (Goldberg 1995: 153)

ただし、自動詞用法の *sneeze* が使役移動構文に生起するからといって、ものを移動させる意味になるかどうかは、最終的には日常生活における語用論的知識が大きく関与していることが指摘されている。たとえば、現実世界においてくしゃみをした勢いでナプキンやティッシュなどがテーブルから飛び落ちることはあるが、ナプキンが膝の上からテーブルの上へ上がることは通常はないので、(32) は容認されないことになる。

- (32) *Sam sneezed the napkin on the table. (Ziegeler 2007: 1006)

以上の観察から、我々は通常の動詞それ自体の語彙の意味からは容認できない用法が、語用論的知識に抵触しない限りにおいて、構文全体の圧力 (Goldberg (1995: 159) はこの構文の圧力による強制的な解釈の操作 (process) を「強要 (coercion)」と呼んでいる) によって可能になることを見た。本節の残りの部分では、強要がどのように問題の *make* 構文において作用するのかについて考察してみよう。

Goldberg (1995: 159) の強要についての骨子は、たとえば (33) のような動詞 *put* の使役移動構文の場合の前置詞句 *on the desk* は、方向を示す前置詞句ではなく場所の (locative) 前置詞句であるが、場所的意味ではなく方向の意味すなわち *onto the desk* の意味に解釈するように構文により強要されるというものである。⁷

- (33) John put the book on the desk.

同様の説明は上記の (29a) と (30a) の例にも適用されて、*park* の目的語 *you* が *your car* の意味に強要され

て解釈されたり、自動詞用法の *sneeze* がくしゃみをすることによって、あるものをある方向へ吹き飛ばすといった他動詞用法の意味で強制的に解釈される。

ここで本題の *She made him a good wife.* について強要の考えを適用してみよう。

- (34) a. *She₁ made him₂ a good wife₃.*
 b. $NP_1 V NP_2 NP_3 \Rightarrow Y_2 HAVE Z_3$

(34) において、*a good wife* は二重目的語構文に強要されて所有の対象となり、彼が良い妻を（比喩的に）所有することにより恩恵にあずかるように解釈されることになる。この際、夫が良妻を持つことで恩恵を得ることは、*sneeze* の場合に言及したのと同様に語用論的知識に照合されて妥当な解釈として成立することになる。

他方、既述した (27b) のような場合は、両親が娘の小学校教諭としての教育活動を享受するという解釈が強要されるが、語用論的に成立しないので容認されないと説明できる。

- (27) a. *She made her students a good elementary teacher.*
 b. **She made her parents a good elementary teacher.*

本節では、統語構造と意味のミスマッチにおいて、強要という概念と語用論的知識が深く関わっていることを主張した。⁸

5. おわりに

小論では、構文文法の視点から統語構造と意味のミスマッチにおける強要という概念を援用して、*She made him a good wife.* の構文型を考察し、*him* と *a good wife* には所有関係が成立するということから、*a good wife* は *made* の目的語であると主張した。

注

* 小論の草稿の段階で、阿部幸一氏（愛知工業大学）から貴重なコメントを頂戴した。ここに記して謝意を表したい。

¹ (2) の記述内容は、Quirk *et al.* (1972) を踏襲している。

² (4) において、本論と無関係な記述は省略されている。

³ (8) の下線は、筆者により加筆修正を施されており原著とは異なる。

⁴ (19) と (21) の中の省略記号 *n.* と *sth* は、それぞれ *noun* と *something* を表している。

⁵ インフォーマントは、Lydburly Language Forum の moderator である。

⁶ 下線及び丸括弧は筆者。

⁷ 詳細については、Goldberg (1995: 159) 参照。

⁸ 何故使役移動構文に *sneeze* が生起することができるのかについて議論する必要がある。たとえば、このからくりの背後には換喩 (*metonymy*) が関与していることが指摘されている (Kövecses and Radden (1998), Ziegeler (2007) 参照)。Kövecses and Radden (1998: 55) は、問題の *sneeze* を換喩「行為の代わりに手段 (*means for action*)」の例文として取り上げているが、Ziegeler (2007: 1015) は、*She tiptoed to her bed.* と同様に「行為の代わりに行為の様態 (*manner of action for the action*)」の例として考えている。

- (i) a. MEANS FOR ACTION: *He sneezed the tissue off the table.*
 b. MANNER OF ACTION FOR THE ACTION: *She tiptoed to her bed.* (Kövecses and Radden 1998: 55)

(ia) において *sneeze* が手段かあるいは様態かという問題はあるものの、換喩が関与していることは明らかである。現時点における小論での考えでは、Kövecses and Radden (1998: 55) の主張に賛同して、*sneeze* は「行為の代わりに手段 (*means for action*)」としておくことにする。なぜなら、*sneeze* という行為は、Ziegeler (2007: 1015) が (ii) の非容認性を説明する際に利用したパラフレーズ '*Sam put the napkin on the table by sneezing.*' からも明らかのように、手段の前置詞 *by* を使用して '*by sneezing*' と解釈されるからである。

- (ii) *Sam sneezed the napkin on the table.

同様の換喩に基づいた説明が, (iia) における you の使用についても適用できる.

- (iii) a. Where are you parked?
b. Where are your car parked?

つまり, 「所有物の代わりに所有者 (posseor for object possessed)」という換喩が関わっていると思える. 詳細については, Kövecses and Radden (1998), Ziegeler (2007), Radden and Dirven (2007: 13-15, 19) 等参照.

さらに, 残された課題として, 小論で問題にしている強要という概念が項構造の分布において重要な役割を果たしているのか, それとも換喩という概念が重要な役割を果たしているのかについて吟味する必要があるが, この議論は別の機会に譲ることにする. 強要についての詳細な議論については, Boas (2011), Goldberg, (1995, 2006), González-García (2011), Jackendoff (1997), Kövecses and Radden (1998), Lauwers and Willems (2011), Levinson (2000), Michaelis (2004), Pustejovsky (2011), Traugott (2007), Traugott and Trousdale (2013), Van Trijp (2015), Ziegeler (2007) 等参照.

参考文献

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.

Boas, Hans C. (2011) "Coercion and Leaking Argument Structures in Construction Grammar," *Linguistics* 49, 1271-1303.

Delacroix, Laurence (2014⁶) *Longman Dictionary of Contemporary English*, Pearson, London. (LDCE⁶)

Deuter, Margaret (2015⁹) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Oxford University Press, Oxford. (OALD⁹)

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago University Press, Chicago.

Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.

González-García, Francisco (2011) "Metaphor and Metonymy do *not* Render Coercion Superfluous: Evidence from the Subjective-Transitive Construction," *Linguistics* 49, 1305-1358.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, The MIT Press, Cambridge, MA.

小西友七 (1996) 『英語のしくみがわかる 基本動詞 24』 研究社, 東京.

Kövecses, Zoltán and Günter Radden (1998) "Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View," *Cognitive Linguistics* 9, 37-77.

Lauwers, Peter and Dominique Willems (2011) "Coercion: Definition and Challenges, Current Approaches, and New Trends," *Linguistics* 49, 1219-1235.

Levinson, Stephen (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, The MIT Press, Cambridge, MA.

Michaelis, Laura A. (2004) "Type Shifting in Construction Grammar: An Integrated Approach to Aspectual Coercion," *Cognitive Linguistics* 15, 1-67.

南出康世 (編) (2014⁵) 『ジーニアス英和辞典』 (第五版) 大修館, 東京.

Pinker, Steven (1989, 2013²) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT Press, Massachusetts.

Pinker, Steven (2007) *The Stuff of Thought: Language as a Window into Human Nature*, Viking, New York.

Pinker, Steven (2013) "The Acquisition of Argument Structure," *Language, Cognition, and Human Nature: Selected Articles*, ed. by Steven Pinker, 160-179, Oxford University Press, Oxford.

Pustejovsky, James (2011) "Coercion to a General Theory of Argument Selection," *Linguistics* 49, 1401-1431.

Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.

Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.

- Simpson, John (2009²) *The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM Version 4.0*, Oxford University Press, Oxford. (OED²)
- 竹林滋 (編) (2002⁶) 『新英和大辞典』 (第六版) 研究社, 東京. (新英和⁶)
- Traugott, Elizabeth C. (2007) "The Concepts of Constructional Mismatch and Type-shifting from the Perspective of Grammaticalization," *Cognitive Linguistics* 18, 523-557.
- Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.
- Van Trijp, Remi (2015) "Cognitive vs. Generative Construction Grammar: The Case of Coercion and Argument Structure," *Cognitive Linguistics* 26, 613-632.
- Ziegeler, Debra (2007) "A Word of Caution on Coercion," *Journal of Pragmatics* 39, 900-1028.